

# 昭和史研究所会報

発行所  
昭和史研究所  
発行人 中村 榮  
〒104-0061  
中央区銀座2-8-12-5F  
電話 03-3567-2250  
FAX 03-3567-2260  
<http://www.showashio.org/>

残されたわずかな時間の中で歴史の証言を収集記録し、後世に伝えます。これは本来国家のなすべき事業なのです。

## 新聞記者の現地レポート

# 通州惨劇とその前後

当時東京日日新聞天津支局誌

橘善守

## 名にそむく保安隊の反乱

昭和十二年七月二十八日、皇軍二句の隠忍は一擲され、第二十九軍騰越の火蓋がついに切つて落された。わが銀翼陣の唸りに明けたこの日、空、陸呼応する皇軍決河の進撃に河北平原は一瞬にして戦雲に掩はれたのである。払暁先づ第三十八師の本拠南苑、三十七師の牙城西苑をはじめ、北平一円の二十九軍大兵営空爆にはじまり、地上部隊またこれに次で果敢な野戦攻城に移った。天津の支那駐屯軍報道部（当時は宣伝部）に固唾をのんで捷報を待つわれらのもとには前線から刻々戦捷が伝へられてくる。午前十一

時には早くも南苑が陥落し、次で西苑も陥ち最も激烈を極めた南苑の戦闘では終麟閣、趙登禹などの敵將陣没して、敵の死傷、支那軍の発表によるも実に五千と註せられ、僅か一日にして京津地方はわが軍の席捲するところとなり、永定河以来敵の大部隊はつひに影を没するに至つたのである。

この夕刻である。百二十度の炎天がサツと冷えて大陸の黄昏が黄色い天津の街に迫つた頃けふの戦捷報道が終つて、一寸一服を楽まうとしてゐる僕のもとには、たゞごとならぬ情報次々と入つてきた。支那街のある邦人紡績工場から「保安隊の動きが怪しい、どうも工場を

襲撃するらしい形勢があるからその旨何とか司令部に報告してくれ」といふ電話。顔色をかへてとびこんで来た支那新聞の記者日君は「天津総站附近に保安隊が陣地をつくつてゐる。危ないから日本租界へ夜中に引越すんだ」と話もそこそこに帰つて行つた。前記工場は天津総站（中央停車場）の近くである。僕はさつき司令部からの帰途「今晚支那兵が租界に攻めてくるんだヨ、ボクは今さつき海光寺（司令部のあるところ）のむかうへ釣に行つて支那の兵隊みたんだもの」といふ街の少年の報告をふと思ひ出した。総領事館に尋ねても、「公安局長李文田（三十八師副師長）がまさかの時にはその生命財産を保護してくれと願出てをり、保安隊も武装解除していゝと洩らしてゐるくらゐだから保安隊が反乱するやうなことはあるまい」といふ。だが僕の第六感はどうしても納得しない。だがもう十二時過ぎだ、総站へ行くには支那街を通過しなければならぬ。いやな予感をどうすることも出来ないの（これを決行したら完全にやられてゐる）東站へ自動車走らせた。予備将校らしいのんびりし

たこの停車場司令官に情報を齎しての帰路、フランス租界の大公報社にY君といふ日本留学出身の友人を訪ねてみた。この支那第一の新聞社深夜の編輯室の慌たゞしさはどうだ！何時もとはちがつて編輯室へは入れずY君があわて、応接室に通した。僕は「これは大変だ」と思つた。何でもあけすけに話してくれる彼が妙にこの夜はそはそはして、齒に衣着せた物言ひである。僕がポイントを押すと、是（イエス）と不是（ノー）だけ答へる。「総站ではなくて東站だらう、通州や太沽からナンか情報が来ないか、支那の飛行機は保定にも滄州にもある。李文田は相当やる」といふのが彼の答や問やである。僕はこゝで、ことは単に天津襲撃ではなく、天津各地に何か起るぞと直感した。事態はいよいよ重大である。大公报を辞したのが一時、深夜の街に立つてゐるフランス租界の巡捕までが、社旗をたてた僕の車に敵意をもつてゐるかのやうである。とにかく「南苑を奪はれた三十八師保安隊を動員して天津包囲の形勢」といつた一電を草して、再び就寝中の〇〇少佐を叩いた瞬間、轟然一発、その旅館の在る日本租界中央部に迫撃砲弾が落下した。時に二十九日午前二時頃と

〈通州事件と天津事件〉通州事件については会報36、37、38号に連載の「生存者の手記」を、天津事件については同71号の〈近代史断片③〉「知られざる天津事件」を御参照下さい。（編集部）

記憶する。僕の予感不幸にも的中して、闇をつんざく彼我銃砲撃の唸りが雷鳴のやうに拡がつてゆく。支那街境の街路を僕は夢中で司令部に車を走らせた。友軍の果敢な応戦に敵の迫撃砲陣が次第に遠ざかつてゆくを感じながら、僕は報道部の一室に夜の明けるのを待った。

果して前夜僕が辞した二時間後に天津東站が猛烈な敵襲を受けてゐる。○○飛行場も襲はれた。例の紡績工場もやられた。しかも天津ばかりではない、通州、太沽、塘沽、軍糧城と、日を同じうし時を同じうして同様の保安隊反乱事件が各地に起つてゐたのである。最も残虐を極めたのが通州で、これが所謂通州事件である。北支における最も安全地帯と何人も信じ切つてゐたこの地にこの惨事が起つただけに、われらは一さう長恨をのむのである。

天津事件からこの記述を進めるのは、一つは筆者が偶々当時天津にあつて事態の推移をつぶさにみてゐたからである。さうして、通州事件も決して突如として単独に起つたものではない。

同日同時に前記各地に発生したやうに、本質的には二十九軍の別動隊として各所に配置されてゐた支那保安隊が二十九軍の本拠南苑、西苑をわれに奪はれたその夜、南京政府のデマ放送による煽動にも、そのかされて一斉に起した全く計画的な、正確には七・二九事件とも呼ぶべき北支保安隊反乱事件の一つとして、

通州事件も把握されねばならないからである。実に二十八日朝、二十九軍長宋哲元の名で、河北省の公安局、保安隊全部に対し、二十九日午前二時を期し日本側に対する総攻撃の密令が発せられてゐたのである。

さうしてまた、当時伝へられたやうに、反乱保安隊の惨忍鬼畜の行爲、彼等に常識あらばわかり切つたはずの南京のデマに踊らされたことなどは、彼らの「無知」支那人の残虐性に帰すべきだが、それだけが決して事件の原因ではなく、全支抗日のナシヨナリズムがかかる無知蒙昧な手あひまでも捉へてゐたといふことを見のがしてはならない。血は常に水よりも濃いのだ。

その限りにおいてナシヨナリズムは理論ではない。

### 言語に絶す近水楼の残虐

かうしたアトモスフェアはわれわれ現地にゐる者には轟々と迫る無気味な悪気流として感じられたのである。たゞ通州はお隣りの冀察政權よりはズツと特殊政權的レヴエルの高いはずの冀東自治政府の首都であり、言はゞ北支の安全地帯としては第一と何人からも信じられてゐたことが、たとへば他の場所だつたらもう少し犠牲が減じられはしなかつたらうかと思はれるほどに、事件を悲惨にした。次に事件の経過を、現地の見聞を材料に回想してみると、この間の事情の肯かれ

る節が多いのである。

二十八日には、その数時間後に血の海と化した通州城内近水楼に冀東政府長官殷汝耕の招宴があり、殷長官の衛隊長であり反乱保安隊の第一総隊長である張慶餘も何くはぬ顔で宴席に侍つてゐた。護衛の保安隊員は玄関で女中と何時ものやうに談笑してゐた。南苑、西苑など北京城外から遠雷のやうに響いてくる砲声をよそに、この親日政權の首都の夜は静かに更けていつた。

この間に悪鬼は牙をといでゐたのである。北京の排日支那新聞と南京発ラヂオによる二十九軍戦捷の虚報に煽動された保安第一および第二総隊の約三千名は前記張慶餘および郭鐵夫等を首謀者として、日本守備隊の手薄に乗じ冀東政府の乗取りを策し、城外から通州包圍態勢をとりつ、二十九軍密令による総攻撃開始の時刻をまつた。二十九日午前二時半に至るや一斉城内に雪崩込み、市民が威嚇射撃の銃声に夢を破られた時には早くも冀東政府はじめわが守備隊、特務機関、領事館派出所など主要機関は悉く反乱保安隊の重圍下にあり電線が切断されて諸機関の連絡は完全に断たれてゐた。反乱保安隊が第一に襲撃したのは殷汝耕長官邸であつたもの、如く、通州特務機関長細木繁大佐（当時中佐）が午前二時半反乱を知るや殷長官の身辺を氣遣ひ直さま軍服に身を整へて長官邸へかけつけた時には、殷長官はすでに拉致され、邸内

はガラ空だつたといふ。大佐が保安隊の兇手にあつて無念の戦死をとげたのはその帰途である。途中大佐を囲んだ一隊は「機関長だ！」との一喝にあひ、氣をのまれて囲みを解いたが、大佐は再び重圍に陥り間近からうたれた銃弾に胸を貫かれてつひに倒れたのである。冀東政府、特務機関、甲斐公館、守備隊などこれと前後して襲はれ通州全城は一瞬にして修羅場と化した。日本人とみれば手当たり次第虐殺し、婦女子に至つては言語に絶する暴行を加へ、血に狂ふ反乱隊は口々に「日本人を殺せ、一人も逃がすな」とわめきながら城内限なく邦人家屋を軒並に乱入して片つぱしから射殺、撲殺、惨殺したのだ。中でも城内第一の日本人旅館近水楼の惨劇は遍く伝へられた如く残虐の限りを尽し、魔の夜にこゝへ泊つてゐた客は全部で十五名、うち同盟通信の安藤記者の脱走成功を除いて、宮脇冀東政府顧問、三島冀東銀行支配人以下十四名悉く遭難、宿の人は旅行中のポーターが一人助かつただけで、主人以下十名の日本人全部が惨殺されたのである。旅館内で落命したのは九名で、あとは屋根裏にかくれたのを見つかり「命は助けるから」と呼び降ろされ、一人々々後手に縛り上げられて北門脇の銃殺場に拉致された。ここは校書里といふ娼家街の裏手、泥池に城壁の赤土が半ば崩れて、茂るにまかせた蘆荻、ドス黒く立並ぶ楊柳、昼なほ妖氣漂ふ陰気な場所である。近水楼だけ

ではない、各所から引致されたあはれな邦人は、男たちは即座にこゝで銃殺され、婦人たちはこの近くの女子師範学堂に監禁、手足を十字架のやうに縛り上げられ言語に絶する暴行を加へられて無残な最後をとげたのである。近水楼からこゝまで引つぱられてきて、奇跡的に生還したのは実に安藤記者一人であつたのだ。

近水楼が襲はれたのは、夜も白々と明けてからといふから、特務機関やすぐ近くの甲斐公館が襲撃されたずつと後のことで、時間的に考へると、こゝの人たちにかつた脱出の時機を握む方法がなかつたらうかと思はれるのであるが、あれだけ平和で、静かだつた通州、むしろ北京あたりからは差当りの非難場所をこゝに求めた人もあつたほどの通州であつてみれば、これほどの惨劇は予想されなかつたのかも知れない。その安全感が却つて禍したといふことのできる所以がこゝにもあるのだ。

## 通州特務機関と殷汝耕

通州特務機関が襲撃を受けたのは午前三時半であつた。これは事務室の黒板に「二十九日午前三時半襲撃さる」と書いてあつたのでそれと察せられる。こゝで特務機関補佐官甲斐中佐（当時少佐）の壮烈な戦死と、機関員の悲壮な奮戦を忘れてはならない。細木機関長外出後（戦死）の特務機関では、補佐官甲斐中佐が十一名の機関員を指揮して反乱隊の襲撃

に備へたのであつた。敵はこの寡兵を侮り、まづ機関を蟻も通さぬと包囲して機関銃の猛射を浴びせつ、卑怯にも機関員の弾丸の尽きるのを待った。甲斐中佐は「皆んな戦死の覚悟で戦つてくれ、決して未練なまねをするな」と機関員一同を激励し、真つ先に立つて奮戦したが如何せん衆寡敵すべくもなく、銃弾四千発を悉く弾ち尽して、機関員十一名中九名までが敵弾に倒れた。生存者の談によると、甲斐中佐は今まではこれまでと白樺に武装を引しめ、右手に軍刀を揮ひ、左手に拳銃を握り、敵中に躍り込み、群がる敵を片つぱしから斬り伏せ、弾ち倒し、軍刀だけでも七、八人を薙ぎ倒したといふ。

中佐もまたあの鋼鉄のやうな胸板に六弾を受け、はじめて「無念！」の一語を残してつひに倒れたのであつた。後で、十文字の白樺に白鉢巻で無念の口を真一文字に結び大の字に倒れてゐる甲斐中佐の遺骸を発見した応援部隊の将士はその天晴れな最期をみて、「武人の最期はかくありたい」と感嘆、たゞ戎衣の袖を絞つたといふことである。甲斐中佐は熊本県の出身、陸士卒業後陸軍委託生として外語支那語科に学び昭和十年支那駐屯軍司令部附となり、この年四月通州特務機関に補佐官として赴任したもので、得意の支那語と太つ腹で保安隊指導には自信満々、事件前天津駅頭で筆者に「僕がぬなけりや冀東は夜が明けんサ」と言つたのが今なほ耳朶に残つてゐる。変り果てた

中佐が天津の自宅に無言の凱旋をした時、長男春作君（当時十三）は、父が生前応接間にかけておいた保安隊の記念写真を引ずり下して「今に俺が仇をとつてやる！」とずたずたにひき裂き、並ある人を泣かせた。これも当時の新聞で報じられてゐると思ふが、この年の春愛息の幼年学校入学を相好崩して喜んだ細木機関長がつひにその将校の卵を見ないで終つたやうに父帰らぬ武人の家庭は常に悲壮である。

特務機関と前後して猛烈な敵襲を受けたわが通州守備隊は僅かの兵力でつひに最後まで守り続けたが戦死十一名を出し、領事館派出所は七名のうち五名、憲兵隊また一名の戦死、これら日本側主要機関の襲撃が一通り済んでから、城内邦人に対する鬼畜の残虐が行はれたのであつた。反乱保安隊はこれでも満足せず、続いて居留日本人家屋の掠奪を二回、三回と繰り返しかへし、履物や茶碗に至るまで一物も残さず、冀東銀行は現金六万元はじめ目ぼしい金品は悉く掠奪された。毒をのむなら皿までといふやつである。

冀東政府側でも殷汝耕長官いち早く拉致され、建設庁長王厦材、財政庁趙從懿、阿氏殺害され、爾余の支那人職員は悉く逃亡し、日本人顧問は殆んど全部虐殺され、政府は公金はじめ金品悉く掠奪にあつて、政府機能も事実上中絶したのである。血に狂ふ反乱保安隊は南門城外に立籠り「冀東偽政府覆滅解消せり、冀東

地区民衆は保安隊の指揮に服従すべし」と冀東各地の県長に偽電を發して冀東地区一帯を攪乱せんとしたが、わが飛行隊の偵察によつて惨事が初めて外部に判り、猛烈な空爆によつて守備隊の重囲も次第に解け、三十日午後には応援の蒼嶋部隊到着、残虐の限りを尽した反乱保安隊は、わが空陸呼応する掃蕩に一とたりもなく潰走、わが軍は更に果敢な追撃を以てその大半を殲滅した。かくして反乱は直ちに鎮圧をみたが、通州全城は鬼哭、折柄の炎暑と雨に無残！遭難同胞の屍は三日を出でずして性別さへも判らないほどに腐爛し、長恨眠り難き百七十余の魂は支那事変最初の貴き犠牲として新生支那人の柱となつたのである。通州事件犠牲者（八月七日北京日本警察署調査）死亡一六三名 行方不明一六七名 計二三〇名。

（「文藝春秋」話 昭和十三年七月号より）

近代和風  
**やまと**  
檜の四寸、  
本建築の住まい。  
本物を志向し、本建築に立ち戻った檜の家。  
日本が誇る、日本の住まいです。

**東日本ハウス**

東日本ハウス株式会社  
本社/〒020-0062 盛岡市長田町2-20 ☎019(624)3261代